

様式第3号

研修報告書（研修費）

令和元年12月6日

長久手市議会議長
加藤和男 様

長久手市議会議員 川合保生 ㊞

政務活動費を充てることのできる経費の範囲の運用指針により次のとおり届け出ます。

年 月 日	令和元年11月6日（水）から 令和元年11月8日（金）までの3日間
研 修 先	第81回全国都市問題会議（霧島市） （行程表は別表のとおり）
成 果	別 紙
経 費	金 72,150 円（政務活動費対象経費） 金 72,150 円（全体経費） （明細は別添のとおり）
提 出 資 料	○研修先資料 ○領収書の写し

※研修を実施した後は議長に1カ月以内に提出するものとする。ただし、1カ月以内が翌年度の4月20日を経過する場合は20日までとする。

行程表

全国都市問題会議 2019

●令和元年11月6日(水)

12:30 藤が丘駅 → 13:25 着 15:05 発 中部国際空港 → 16:45 着 17:10 発 鹿児島空港 → 18:00 着 鹿児島中央駅前 → 18:15 着 サンデイズイン 鹿児島

名鉄バス ANA355便 南国交通高速バス タクシー

●令和元年11月7日(木)

7:00 発 サンデイズイン 鹿児島 → 7:05 着 7:15 発 鹿児島中央駅西口 → 8:00 着 17:15 発 国分体育館 → 18:15 着 鹿児島中央駅西口 → 18:20 着 サンデイズイン 鹿児島

タクシー シャトルバス シャトルバス タクシーイン鹿児島

●令和元年11月8日(金)

7:00 発 サンデイズイン 鹿児島 → 7:05 着 7:15 発 鹿児島中央駅西口 → 8:00 着 12:20 発 国分体育館 → 12:50 着 16:30 発 鹿児島空港 → 17:45 着 18:40 発 中部国際空港 鹿児島

タクシー シャトルバス 無料シャトルバス ジェットスター696便

19:35 着
藤が丘駅

費用明細

藤が丘	⇔	中部国際空港	3,200円	往復名鉄バス
中部国際空港	⇔	鹿児島空港	36,700円	往復搭乗券
鹿児島空港	→	鹿児島中央駅前	1,300円	南国交通高速バス
鹿児島中央駅西口	⇔	国分体育館	4,500円	シャトルバス乗車券×3回
ホテルサンデイズイン鹿児島				
	⇔	鹿児島中央駅西口	930円+780円+730円÷4人=610円(タクシー3回分)	
大会参加費			10,000円	
宿泊費			15,840円	
計			72,150円	

令和元年12月6日
川合保生

第81回全国都市問題会議研修報告

会議日程について

1日目 令和元年11月7日(木)

9:30 開会式

9:50 基調講演 鹿児島県の歴史から学ぶ防災の知恵

志学館大学人間関係学部教授 原口 泉 氏

11:00 主報告 霧島市の防災の取組 ―火山防災―

鹿児島県霧島市長 中重 真一 氏

12:00 昼食 休憩

13:10 一般報告 災害とコミュニティ：地域から地域防災力強化への答
を出すために

尚綱学院大学人文社会学郡長 田中 重好 氏

14:40 一般報告 平成30年7月豪雨災害における広島市の対応と取
組みについて

広島県広島市長 松井 一實 氏

15:50 一般報告 火山災害と防災

防災科学技術研究所火山研究推進センター長

中田 節也 氏

17:00 終了

基調講演にて原口氏は南九州の災害は洪水、台風、旱魃、虫害、疫病のサイクルを繰り返し、尚且つ加えて噴火、地震、津波が被害を増幅させた、そんな歴史であったと述べた。そして南九州人はこの厳しい環境の下、どう暮らしてきたのかという疑問に、シラス台地におけるガマの利用があった、と言う論理で説明をされた。そのガマ文化が災害常襲地帯である南九州に生まれた、独自のシラス文化であると言える述べられている。しかしその文化は近年忘れられ、事故等危険であるとの理由で埋められているとの事である。そして門割制度という防災農法の話から南九州では災害が起きることを前提として、社会が築かれていたと考えられる。だから、我々も災害は自分の身近なところで起こりうる可能性があると言う認識を持って、防災対策を考えるべきではないかと述べている。災害は忘れたころにやってくるという言葉は我が市のように、今まで大した災害もなく平和に過ごして来た町でも常に考えて行かなければならないと

改めて思った次第である。また、彼は歴史資料が度重なる災害、戦災にて失われたもの、人災によって失われたものが多かったので残ったものを後世に伝えるため公文書館を設けるのが我々の責任であるとも述べている。そのとおりである。我が市も何よりも早く資料館を造るべきである。

次に主報告として中重真一霧島市長が鹿児島県には11の火山がある、霧島市においては新燃岳が噴火をした時の対応状況、火山防災への取り組みとして住民、登山者への安全対策、農業被害対策、観光産業への被害対策、自治体間、関係機関との連携・協力について話をされた。が火山災害だけではなく台風大雨による豪雨水害に対しても住民一人一人の自助、地域、ボランティア、企業の協力による共助、が重視されているとの事であった。我が市には火山はないが、いつ大規模地震が起きるかもしれないと常に言われている地方であるのでその心構えを住民に認知して貰うための施策をすぐにでも考えるべきであると感じた次第である。

午後から一般報告として田中重好氏が講演された。1として注目されるコミュニティ防災、「共助・自助」、2としてコミュニティをどう捉えるか、3として災害時のコミュニティの実態、4として現在の防災・復興対策におけるコミュニティに関連する課題・問題点、5として、では、自治体で、どうコミュニティ対策をしていったらいいのか、という問題提起であった。彼が述べた中で印象に残ったのが「市民の命を助ける」「生活コミュニティが大事」である。どうしたら一番良いのか、私にとっても喫緊の課題なのかもしれないと思った次第であった。

次に松井一實市長による平成30年7月の豪雨災害における対応等について話を聞いた。結果、結論として災害に対しての市民の意識向上が大切という一番単純なことを、どう広めていくかが課題であるとの再認識であった。

次の中田節也氏の講話は火山の話であり我が市とは縁が無さそうであったので割愛する。

2日目

9 ; 30 パネルディスカッション

「テーマ」

防災とコミュニティ

「コーディネーター」

追手門学院大学地域創造学部地域創造学科長・教授 田中正人氏

「パネリスト」

専修大学人間科学部教授

大矢根 淳 氏

香川大学地域強靱化研究センター特命準教授

磯打 千雅子 氏

霧島市国分野口地区自治公民館長
静岡県三島市長
和歌山県海南市長

持留憲治氏
豊岡武士氏
神出政巳氏

それぞれのパネリストが防災とコミュニティに関して意見を出されたが、そのなかで大矢根氏が言われた土手の花見の話、防災MAPづくりには多様な人々の参加が必要である等結構ためになる話が聞けたと思う、磯打氏は組織のみならず防災対策施設の機能継続を目的としたBCP(Business Continuity Plan:事業継続計画)、地域住民の生命、財産、地域の経済、文化、環境を守るためのDCP(District Continuity Plan:地域継続計画)の策定・実践により地域一体を強靱で粘り強い社会構造へ転換する事が急務である、と言われる。持留氏は地震の経験による話をされた。豊岡市も神出氏も同様の話であり、私を感じた事は今後、益々異常気象による災害が増えて来るだろうと予想されている、また、大規模地震、それに伴う津波、我が市においても何が起こるか分からない状況がある。やはり防災拠点としての市庁舎の建て替えを急ぐべきだと感じた次第である。